

會員の頁

第25巻第7號 昭和14年7月

遞信技師野口誠氏の訃を悼む

會員 伊藤 剛*

5月16日晚、食事中折柄配達された夕刊を見ると又々旅客機の事故が報ぜられてゐた。昨年暮内務省の藏重技師の遭難以來旅客機の事故は他事ではなく感ぜられるので早速遭難者氏名を見ると野口 誠氏の名が見えた。本能的に立上つて書齋にかけこみ学士會名簿をくつて見た。野口氏の住所が見つかる迄の何ともどかしかつたことよ。新聞記載の住所と一致してゐては最早同名異人の望みも絶えた。

7時のラヂオ=ニュースを聞いて見たが旅客機事故の詳細は無かつた、八王子市に住んでゐては直ぐ何處かへ聞きたゞす術も無い。只近頃頻發する旅客機事故を押し切れない感情で慄む許りである。最近の事故では何れも縁故の人を失なつてゐる。臺灣航路と云ひ、4月の天津大連間の事故と云ひ、そして又々敬愛する一先輩を失なつた。私も數回航空の經驗を持つ。プロペラの音が最高になるや否や車輪が地上を離れ飛行場のはずれがもう直ぐだとヒヤッとする瞬間、機は相當の高度に達してゐる。ホツトして振り返ると今離陸した許りの飛行場には見送りの人が小さく見えてゐる。この瞬間誰でもまあまあと思ふものだ。新聞記事によると野口氏乗機の事故はこの時に起つたらしい。内務省土木試験所の高田技師が近々北支に行かれると云ふ話を聞いてゐたから野口技師も或は同じ用件で同じ方向に行かれたのかも知れぬ。或は他の用事だつたか私は知らない。

野口氏の追悼文を書くには我々後輩の出る幕ではないかも知れぬ。併し中学、高校、大学を通じての後輩として、又土木學會の編輯委員會その他の會合の同僚として、又特に最近私が入つた發電水力界の後輩として、敬愛畏服する先輩の訃を悼まざるにはゐられない。

遞信技師野口 誠氏は東京府立一中、一高、を経て東京帝大土木工学科を大正14年に卒業、それからずつと遞信省電氣局水力課に職を奉ぜられ、最近電氣廳が出来るやそちらに移られた。そして又昨年暮あたりか

ら興亜院の宮本技術部長に囑望されて興亜院にも兼務されてゐた。野口氏を知つたのは私が内務省の土木局に転任して來た頃からであつた。その頃氏は土木學會の編輯委員をやつてをられ又抄譯も擔當されてゐたし私も抄譯をしてゐたのでよく話し合ふ機會があつた。その後も土木學會の委員會を通じて交際の機會が多かつた。その頃から氏は遞信省を代表して土木學會に入された。やつてゐる仕事も似てゐたので公務上で會ふことも多かつた。卒業年次は大正と昭和と分れてゐたが年齢がさう違ふわけでは無いからよく色々の問題を論じ合ふことがあつた。大正と昭和とで丁度社會情勢が變つた時期だつたので學術上のことは別として技術者の立場等の問題に就ては意見の違ふ點の方が多かつた様だ。之は或は内務省と遞信省との違ふ點であつたかも知れぬ。一つの例として2年前常議員選衡委員會に同席し「私は此の度常議員に出るつもりだがあなたも如何です」と云つた所氏は「遞信省には土木技術者が少いから、今強いて出なくつても順番が廻つて來れば出ざるを得ない時期が来る。その時でも遅くはない」と云はれた。私は「その調子で行けば常議員は何時でも同一時代の人ばかりがなり進み方が偏してつふ」と答へたのを覚えてゐる。その後も編輯委員會でよく一緒になり、そしてその機會に我々のやつてゐる報國聯盟や何かにつけ御注意を戴いた。何の隠すこともなく思つたことをはつきりと述べて後進を導いて下さる御好意には常に感謝してゐた。遞信省内でもこの様に後進を導いてをられた様子が見受けられた。そして餘り若い中から社會がどうのこの方面に許り氣をとられて技術の本質を磨くの忘れるなど忠告された。2ヶ月許り前私が神奈川縣に入つたので挨拶旁々お訪ねした所、話は遂に河川統制事業に移り、この事業に就て遂々大議論となつて了つた。そして結論は次の機會に譲ることにして、丁度晝だつたので省内食堂で晝食を御馳走になつた。この時省内の若い技師連も

* 神奈川縣土木技師 工學士 相模川河水統制事業建設事務所勤務

一緒に招かれ食堂で色々な問題を話し合った。この時私は野口氏は水力界に多年身を置き乍らも水力發電事業の他の制水や治水事業との關係に對する意見が我田引水的でなく極めて公正であるを知つて誠に敬服したのであつた。それと同時に後輩をよく導くことに努力されつゝあるのを知り稀に見る技術者であると感じたのである。

最近氏と會つたのはある會合であつた。この時同席された東京市の水道の岩崎博士に私と一緒に詰めより、「岩崎博士に土木賞を差上げたのは我々土木學會の

編輯委員ですぞ、何とか一席別宴を設けて御挨拶願へませんか」と談じこんだ。

最近私は是非氏をお訪ねして先の議論の結末をつけ、併せて色々な問題の御指導を乞ふつもりで遂々その機會が無いのを憾んでゐた所であつた。今日突然氏の急逝を聞き肉身的の感情の沸き起るのを抑へ乍ら、先輩後輩の隔ても忘れ考へついたことを批評し議論して戴ける遞信畑の一偉才を失つたのを悲しむ心で一杯である。